

「世界の文化創造拠点 ARITA プロジェクト」
— 九州陶磁文化館改修に係る基本方針—

第1章. 目的・目指す姿

本計画は、「世界の文化創造拠点 ARITA プロジェクト」の一環として策定するものである。有田焼をはじめとした世界に誇る佐賀の本物の陶磁器文化を核に、文化への関心が高いインバウンドを惹きつけ、地域との交流を促進することで、有田そして佐賀が、新たな文化が生まれる世界レベルの文化観光エリアとなることを目指す。

その中で、佐賀県立九州陶磁文化館（以下、「九陶」という。）は、有田の町全体を、生活や歴史・文化の営みが肌で感じられる「生きたミュージアム」の中核（コア）施設と位置づけ、周遊の起点となるゲートウェイとする。九陶をコアに、泉山磁石場、トンバイ堀の町並み、各窯元など、有田町内に点在するスポットを「サテライト」としてつなぎ、エリア全体のポテンシャルを上げ、魅力化を図る。さらに、九陶の展示の魅力を高め、世界の文化関心層が目的地として訪れるディステーションへ進化させ、来訪者を引きつける「求心力（目的地性）」と周遊を促す「遠心力（まちへの周遊）」を併せ持つ、文化観光ハブ拠点とする。



第2章. 九州陶磁文化館の現状と課題

1. 現状

- **施設の概要:**

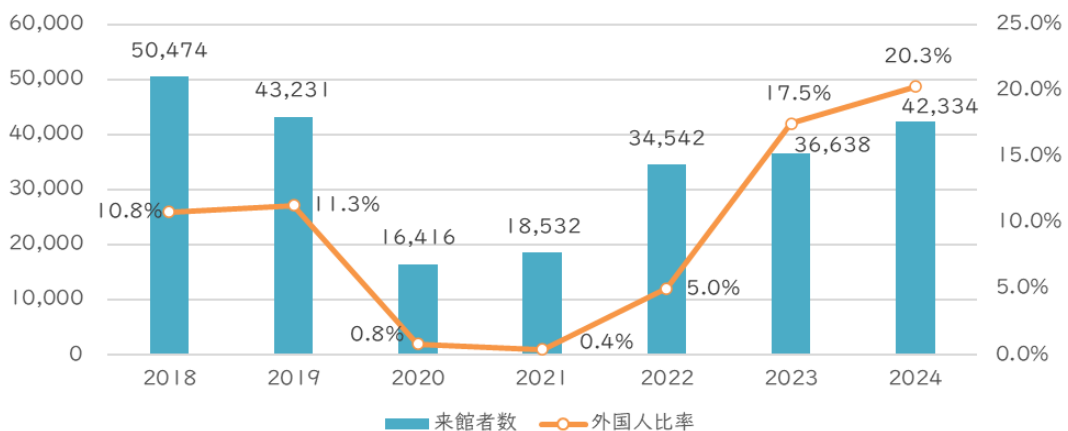
- (1) 所在地 …佐賀県西松浦郡有田町戸杓乙 3100-1
- (2) 開館 …昭和 55 年(1980 年)11 月 1 日
- (3) 規模 …敷地面積:43,619.59 m²
建築面積: 3,831.93 m²
延床面積: 6,526.54 m²
- (4) 構造 …鉄筋コンクリート造地上 2 階、一部 3 階建
- (5) 特徴 …

主要材は陶磁器発祥の地ということで、内外部の主要材料は磁器タイル。現代における鉄の技術を示すことと、日本古来の材料である木を使うことを決定し、三つの材料を、人の触れる建物の肌の部分に使うことにより、時代と歴史と風土を象徴する建築となっている。

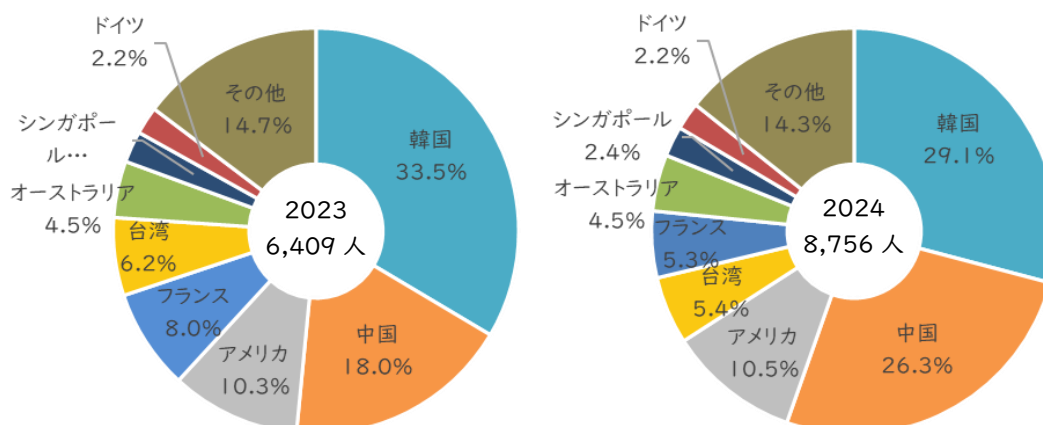
- **インバウンドの増加:**

来館者の外国人割合は 20%を超え(R6 年度)、アジア圏だけでなく、欧米からの来館者も多い。陶磁器文化に関心が高い欧米の個人旅行者(FIT)にとって、有田焼をはじめとした九州の陶磁器の歴史・文化を知るための重要な目的地となっている。

佐賀県立九州陶磁文化館 来館者の推移



国別外国人来館者の動向



- **コレクションの価値:**

柴田夫妻コレクションをはじめ、重要文化財を含む約3万点の陶磁器を所蔵し、量・質ともに日本が誇るべき陶磁器専門の展示施設である。

- **市民との関わり:**

市民ギャラリーとしての機能も有しており、地域の文化芸術活動の発表の場や地元学生の貴重なキャリア教育の場としても活用され、地域住民にとって身近な施設として認知されている。

2. 課題

以下に記す課題は、現地調査および関係者ヒアリングにより得られた声をもとに整理したものであり、九陶のすべての課題解決を意図するものではない。本プロジェクトでは、★印を付した課題を優先的に対応し、展示体験機能の向上およびコンシェルジュ機能の実装を通じて、来館者の行動変容と地域への波及効果を創出することを目的とする。

- **コンシェルジュ機能の実装に直結する課題**

- **地域と来館者をつなぐハブ機能の不足 ★**

現在、鑑賞体験を起点として、泉山磁石場や町並み、窯元、アリタセラ等の町なかショップへと来館者を誘導する仕組みや導線が十分に整備されていない。また、若手作家や現代の窯元の活動・作品情報が館内で体系的に紹介されておらず、来館者が「次にどこへ行けばよいのか」を自ら判断しにくい状況にある。

その結果、来館者の多くが九陶での鑑賞を終えた後、町へと周遊せずに帰路につき、地域経済への波及効果が限定的となっている。

→ 来館者一人ひとりの関心に応じて、町なかの体験・人・場所へと送り出す役割を担うコンシェルジュ機能が未成熟であることが、周遊促進を阻害している。

- **展示体験機能の向上に直結する課題**

- **展示が来館者の行動変容につながっていない ★**

第1展示室を除く展示室は、開館当初(1980年)の展示構成を色濃く残しており、作品名・窯場(地域)・年代などの事実情報(fact)を中心とした展示にとどまる。その結果、陶磁器が持つ歴史的・美術的価値や、有田焼が世界との繋がりや文脈、作り手の思想などの「物語(story)」が十分に伝わりにくい。

このため、来館者が「もっと深く知りたい」「実際の産地や窯元を見てみたい」「誰かに語りたい」などの次の行動へと踏み出す動機が生まれにくく、鑑賞体験が館内で完結してしまっている。

→ 展示体験が、来館者の行動変容(周遊・再訪・共有)を引き起こす「トリガー」として機能していないことが、展示体験機能実装上の根本的な課題である。

第3章. ターゲット設定

本計画では、以下の2層を主要ターゲットとする。

主に欧米を中心とした文化関心層

(FITの目的型旅行者(Art/Craft Seeker:アート・クラフトシーカー))

- 本物の文化体験、歴史的背景、職人の精神性に価値を見出し、正当な対価を支払う層。
- 有田焼の歴史的認知度が高い欧米市場。



※地域住民(町民・県民)

- ホスト役となり、陶磁器文化等を語るうえで、来訪者を九陶に案内する。
- 佐賀の陶磁器文化をとおして、地元の誇りを再確認する。

第4章. 整備の基本方針:役割と機能

<役割>

世界の文化創造拠点実現のためのハブであり、行動の起点

九州陶磁文化館は資料、情報等のリソースを多く集積する場であるため、ここに望まれる新たな設備やコンテンツを付加することで本事業におけるハブ拠点の実現を図る。

<機能>

・ コンシェルジュ機能:

窯元での作陶現場の見学や、作家・職人との対話など、より深い文化体験を求める来館者に対して、産地や窯元の背景、特色、現在の取り組みなどを丁寧に紹介するとともに、体験内容や来訪希望に応じた見学・体験プログラムの情報提供および予約支援を行う。

さらに、有田町内の歴史資源や町並み、ショップ、飲食、宿泊施設等を含めた周遊の提案に加え、唐津・伊万里・武雄・嬉野などの周辺地域の陶磁器文化や温泉、食文化なども含めた広域的な周遊プランニングを行うことで、来館者が自身の関心に応じた最適な滞在ルートを描けるようサポートする。

この機能により、九陶は単なる情報提供の場にとどまらず、来館者を産地へと送り出す「文化体験の起点」として機能し、地域との出会いを自然に生み出すハブ拠点となる。

• 展示体験機能:

来館者が展示を通じて陶磁器文化の背景や価値を立体的に理解し、自身の中に「物語(story)」を紡いでいけるような展示体験を提供する。

有田焼をはじめとする陶磁器が持つ歴史的・美術的価値、技術の革新性、作り手の思想や時代との関わりを、わかりやすく、かつ奥行きのあるかたちで伝えることで、専門知識の有無を問わず、幅広い来館者が深い理解と感動を得られる展示を構成する。

展示体験は、単に「見る」「知る」ことにとどまらず、鑑賞後に

「実際の産地を歩いてみたい」

「窯元や作家の現場に触れてみたい」

「暮らしの中で器を使ってみたい」

などの次の行動へと自然につながる動機付けを生み出す役割を担う。

これにより、九陶での鑑賞体験が、町なかや産地での体感的な文化体験へと連続し、来館者一人ひとりにとって記憶に残る、深度のある文化体験へと発展していくことを目指す。

第5章. 施設改修の考え方

九陶は、昭和 55年(1980年)に開館。展示室は5室あるが、目指す姿の実現に向け、優先順位を整理のうえ、エントランスロビー、第3展示室、第4展示室、第5展示室の改修を重点的に行う。第3, 第4展示室は、展示の魅力化を、第5展示室は来館者を窯元や街中へ周遊するトリガー機能を付加するとともに、エントランスロビーにコンシェルジュ機能を付加する。

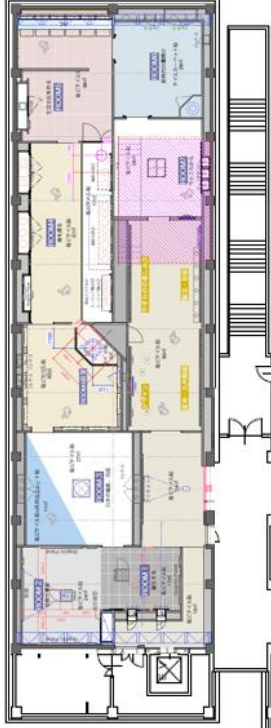
《現状》

エントランスロビー★	受付カウンター、ミュージアムショップ
第1展示室(有田焼の歴史)	令和4年度リニューアル
第2展示室(柴田夫妻コレクション)	令和4年度一部展示改修
第3展示室(九州の古陶磁)★	開館当時の展示ケース・空間
第4展示室(現代の九州陶磁)★	開館当時の展示ケース・空間
第5展示室(一般展示室)★	市民ギャラリー機能。 茶室があるが、防犯設備やガラス戸がなく 展示設備として活用できていない状況

★ 本プロジェクトで改修を想定

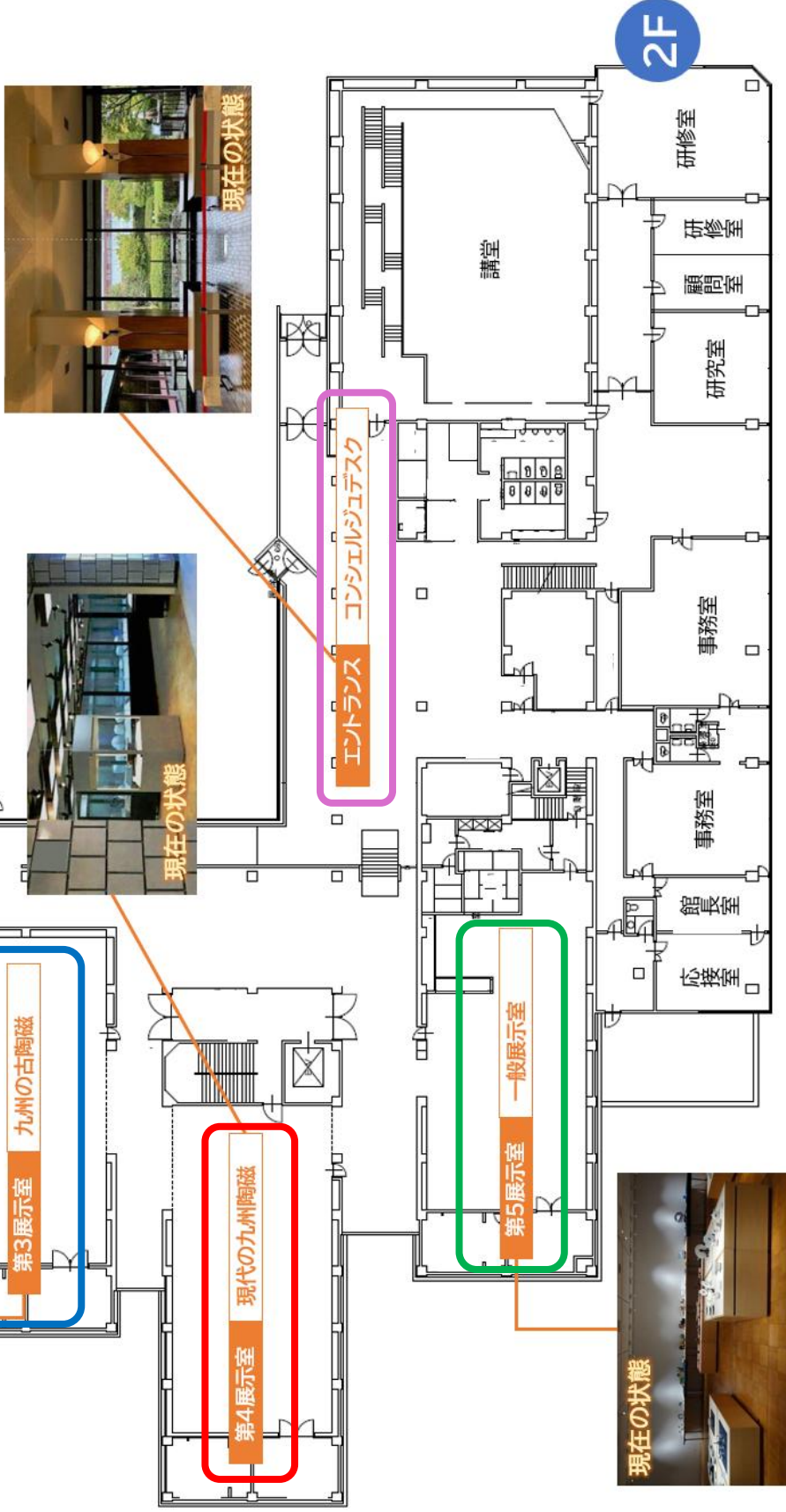
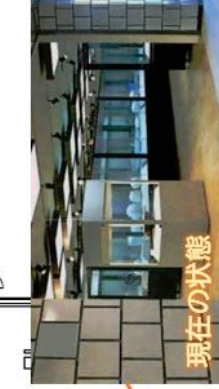
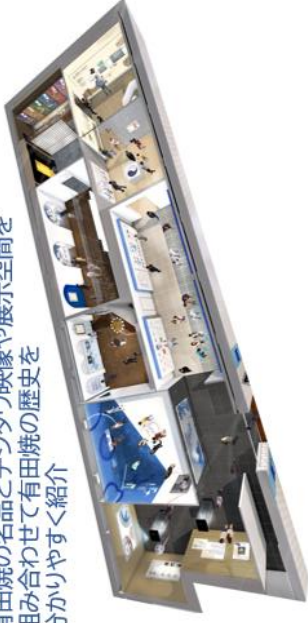
改修対象展示室

第1展示室 有田焼の歴史



令和4年(2022年)4月 全面リニューアル

有田焼の名品とデジタル映像や展示空間を
組み合わせて有田焼の歴史を
分かりやすく紹介



1. エントランスロビー

コンセプト／

既存建築の落ち着いた魅力ある空間を活かしつつ、デジタルと人的サービスを融合させる。

主な改修方針／

(1) コンシェルジュカウンターの設置：

エントランスホールに、コンシェルジュ機能を設置し、有田町内や他地域（唐津、伊万里、武雄、嬉野）への周遊を促す。ただし、設置範囲にあたっては来館者の動線に支障をきたさず、中庭の景観やエントランスのデザインとの調和をとること。

※コンシェルジュ機能の設置にあたっては、人員配置やデジタル技術、AI 等の活用を今後検討する。

(2) デジタル設備を設置：

エントランスホールに、コンシェルジュのサポートツールとして、モニターやタブレット端末等の情報提供機器を設置し、有田内山地区、窯元、観光スポット、他産地（唐津焼、伊万里・鍋島焼、武雄焼、肥前吉田焼）への導線情報等を視覚的に表示する（来館者自身で操作することも想定し、複数台設置）。

2. 第3展示室（九州の古陶磁）

コンセプト／

「九州全域の古陶磁」というテーマを維持しつつ、鑑賞環境の質を高める。特出して目立たせた名品鑑賞のコーナーを創出するなどしてメリハリのある展示空間を創出する。

改修内容／

● 展示什器の更新：

展示点数は基本的に維持しつつ、古臭さを払拭するため、内装を改装し、リフレッシュする。

- **設備の更新:**

展示ケースおよび展示用品（キャプション等）の更新を行う。

展示ケースは、地震災害の影響を考慮した壁ケースと独立ケースの2種類で組み合わせ、観覧者の動線が自然に誘導できる配置を創出する。

独立ケースについては、少なくとも2台は重要文化財のための展示環境を備えた密閉ケースを導入すること。

3. 第4展示室（現代の九州陶磁）

コンセプト

「現代の九州陶磁」というテーマを維持し、陶芸作品の鑑賞にふさわしい空間を創出する。

- **展示什器の更新:** 古臭さを払拭するため、内装を改装し、リフレッシュする。

- **設備の更新:**

展示ケースおよび展示用品（キャプション等）の更新を行う。

展示ケースは、地震災害の影響を考慮した壁ケースと独立ケースの2種類で組み合わせ、観覧者の動線が自然に誘導できる配置を創出する。

4. 第5展示室（産地接点や市民活動の場）

コンセプト

陶磁器文化や産地の素晴らしさと価値を体感するとともに興味を喚起し、産地への周遊を促すトリガーとなる展示。従前の市民ギャラリー（貸展示室）との両立。

- 第5展示室の空間を大きく2つに分けて活用するなど、コンセプト実現のために配置等を工夫するとともに、古臭さを払拭するため、内装を改装しリフレッシュする。

(1) 茶室周辺

- 既存の茶室空間を活かし、陶磁器のある日本的な生活空間を演出。
- 日本文化と器の関係が分かる映像を制作し投影するなど工夫する。

(2) 市民ギャラリーエリア(貸展示スペース)：

- 産地への周遊を促すトリガーとなる常設展示、映像等による魅力的な演出。
- 什器を移動し、投影する映像等はスイッチをオフにすることにより、貸展示スペースとして利用できるようにする。
- フレキシブルな展示什器や可動壁の導入も検討する。

【参考】第5展示室の市民ギャラリースペース利用の現況

- ・年間で展覧会を10回程度開催(うち、主催が2回、貸展示室が8回程度)

※展示室の改修にあたっては、酢酸、ギ酸、ホルムアルデヒドなどの有機酸の濃度が抑えられ、防虫、防カビ等、展示の保存環境に配慮すること。

第6章. スケジュール

以下の工程で進める。

	R7 年度	R8 年度	R9 年度	R10 年度	R11 年度
基本計画		→			
基本設計		エントランス部 → 全体 →			
詳細設計		エントランス部 →	展示室 →		
エントランス部施工 (コンシェルジュ)		→			
展示室改修施工 (第3~5展示室)			→	→	
文化観光ハブ機能導入	構想	→	運用	→	→
周遊案内・サイネージ等	検討	→	導入	→	→